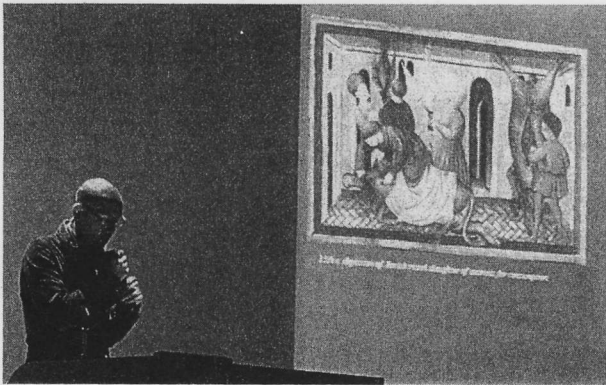


文化

視覚的な素材も使って行われたシンポジウム「変化する人種イメージ」(5日、京都市左京区・京都大)



変化する人種イメージ

京大でシンポ

差別や偏見にもつながる人種イメージはどう変わり、背景には何があるのか。京都大で五日に開かれた国際シンポジウム「変化する人種イメージ―表象から考える」では、科学的な区分の根拠が疑問視されながら、今も「人種」のリアルさを支える「科学的言説」やメディアの状況が多角的に分析された。

(文化報道部 道又隆弘)

前アメリカ社会学会「チャール」が今秋、掲載し会長のトロイ・ダスター「アジア人のゲノム配列は、英科学誌「ネイ」列を初解析」という記

影響強いメディアの情報

差異が差別に変わるプロセス

事に触れ、「すでに白人男性のゲノム(全遺伝情報)が判明しているのに何が重要か」と指摘。ユネスコの人類声明や「人種概念に生物学的根拠はない」との研究結果に反する言説が、この十年で目立ってきたと語った。さらに、新薬の治験などで、人種的な遺伝情報の差異を治療効果の差に結びつけたケ

種という概念で運動能力の差異は説明できない、という指摘にもかかわらず、メディアの表象と現実の差が補完し合い、『黒人身体能力神話』を強めた」と指摘。ハリウッド映画での黒人の描かれ方はその典型で、一九八〇年代まではアフリカ系米国人自身もこういった言説を支持していたという。

でも「小説家を見つけたら」など知性や勤勉さ、指導力に焦点を合わせた作品が急増。「映画は特に若者への影響が強く、米国内に限らず世界中の偏見を改めていくのではな

いかに」と話した。中米ベネズエラの状態を報告した石橋純・東京大准教授は「自らを『混血社会』と自賛しながらも、肌の色による序列は存在し、白は美や豊かさ、黒は貧しさなどを表すのは欧米と同様」と説明。ただし、濃い肌色のチャベス大統領の下で、人種対立が表面化し、多文化主義が明文化されたこと

で変化の可能性もある、と指摘した。一方、日本では「見えない人種」として、さまざまな差別的表象がつけられてきたことが報告された。

見えぬ差別記憶に

黒川みどり一橋大教授は、部落差別を描いた映画「橋のない川」新旧二作を題材に、差異が視覚以外のイメージで植え付けられた事例を紹介。差が見えない分、記憶に強く刻みつけられ、集落単位で伝承されてきた歴史などを指摘した。

李昇煒・京大助教は植民地下の朝鮮民族への差別構造を検証、「日本人と識別が困難な故に、体格や顔、言葉においてまでも人種の見分けに使われ、多様な疑似科学が『差異』究明に没頭して、人種主義による支配体制を支えた」とした。

これら議論を受けて、斎藤綾子・明治学院大教授は、フランスの映画監督ゴダールの「映画は現実の反映でなく、反映の現実だ」という言葉を紹介。「人種概念が何かというより、差異がどうやって差別という価値観に変わるのか、そのプロセスを注視すべき」と述べ、ダスター教授も「人種概念の是非ではなく、どんな状況で人種を区分けに使うかが重要」と強調した。

分野超えて検証を

二日間の議論では、人種主義を克服する上で、科学的検証、生活感覚のどちらも正負両面に働く危うさが示された。だから「こそ」ゲノムから人類学、歴史学、アートまで分野横断的にかかわることが重要になる」と(竹沢教授)という姿勢が、京都から世界に広がることを期待したい。